

体育・スポーツに対する意識・態度 に関する考察

鈴木 文明 (中京大学社会体育研究室)

柳 根 林 (韓国慶熙大学校)

藤 原 健 固

A STUDY OF THE CONSCIOUSNESS AND ATTITUDE FOR SPORT OF COLLEGE AND HIGH SCHOOL STUDENTS

Fumiaki SUZUKI

Konling RYOO

Kengo FUJIWARA

It is true that we Japanese got the high living standard since we oriented to the matured society through technological innovation. Because, it produced satisfactory results, especially in the economic stand point.

However, we have to remember the human being himself. We lost the touch of humanity, as the result of rapid economic progress.

In this sense, sport has great meaning for us. In this paper, the present authors surveyed the consciousness and attitude for sport of college and high school students.

Some findings were as follows.

- (1) The general attitudes for sport is decided through the degree of the knowledge and technique for sport.
- (2) The motivation for sport is more inner-directed type than other-directed type, but the tolerable players are intended to conscious to others.
- (3) It can not be true that sport has definite effect for the function of reinforcement for social norms and values.
- (4) In generall, players are not so great influenced by their coach or director.

1 研究視点

技術革新による生産性の向上、経済の高度成長は人口の過密化や人間疎外を招き、自然環境を悪化させるなど様々な社会問題を噴出させた。しかし、それは所得の増加と労働時間の短縮をもたらしたことも周知の事実である。所得の増加と労働時間の短縮は、人々の生活を豊かにするとともにゆとりをもたらし、生活の関心を物的欲求から少しずつ変化させた。

しかし、余暇活動に人々が目を向けたのは、余暇時間と所得の増加だけを理由としているのではない。磯村は現代人のパーソナリティの特殊性として、次の四つの型をあげている。⁽¹⁾

- ① マスコミなどの借り物の人間関係によってつくられるステレオタイプ。
- ② 組織の中で与えられた職能を、受動的にくり返すことによってつくられる受動型。
- ③ 同じ型の作業をくり返し、自らの創意や工夫を加える余地がないことから生じた標準型。
- ④ 個性を生かすことができない結果、地域社会へのつながり、町や村のような地域社会へのつながりも無関心になる無性格型。

このような人間性の歪みは、技術革新に伴う都市集中化、生活や生産様式の機械化およびマスコミの発達による身体運動の制限、体力の低下などに伴う人間としての主体性、創造性の喪失によるものであろう。そこで、T.パーソンズが問題にしている、『今日の時代状況において個人はいかにして生きることを意味を発見することができるのか、またいかにして個人は、不安定で懐疑的でそしてよくいわれるように「物質主義」的な時代に信念をもつことができるのか。』⁽²⁾を考えた時、余暇活動は当然重要となってくる。つまり余暇活動に人々が目を向けた、否、目を向けなければならなかったのは、高度成長社会が生みだした人間疎外からの人間性の回復、複雑化した社会機構のメカニズムから一時的であっても逃避し、解放されたいといった現代人の願望が大きくはたらいたと考えられる。

このような現代社会において、一般に人間形

成や人間性回復に効果があると認められている体育・スポーツへの期待は大きい。人格治療あるいは人間性の回復について考えてみると、障害の原因の把握と処方箋が特に重要である。治療にはいろいろな方法が用いられるが、その基礎として鈴木は次の三つをあげて、体育・スポーツと治療との関係を明らかにしている。⁽³⁾

① 情緒の発散、② 生活への洞察、③ 生活の訓練、このような効果は、人間性の歪みを矯正するはたらきにつながるものであり、人間性回復のために、遊び・スポーツ・体育が大きく貢献する可能性を示している。

教育の一環としての体育の究極的な目標は身体運動を通しての人間形成であり、身体運動を媒介とした体育の場においては、それを期待する可能性は大きい。体育やスポーツにおけるパーソナリティの研究においても、スポーツを実践している人々にスポーツマン的性格とよばれる性格をもつものが多いことから、身体運動に興味をもつようなパーソナリティがあり、それが興味を持続させ活動させることによって、それをさらに助長させていくといったような関係があるように思われる。

ここでは人間の行動傾向としての、パーソナリティの形成、変容に結びつく意識と態度の問題を扱った。スポーツに対する態度の問題は、スポーツそのものに対する態度の問題と、スポーツによって形成される態度の問題のふたつに分けて考えることができる。⁽⁴⁾このふたつの問題は相互に関連し合ったものである。体育の学習やスポーツの練習において、体育やスポーツに対してもっている態度が運動の方法や進歩の程度を決定するひとつの要因となる場合があり、また学習や学習効果をあげるために必要な態度をいかにしてつくるかという、学習指導にかかわる態度の問題がある。すなわち、ある態度によって運動技能が高められ、それによってより望ましい態度がつくられ、最終的には社会的に望ましい態度を形成し、パーソナリティ形成に貢献するという経過が期待される。

態度の主な対象としては、学校体育に対する態度、対外試合に対する態度、勝敗に対する態

度、スポーツ集団に対する態度、スポーツマンの社会的態度などがあり、これらについて調査をした。本稿では、大学生（体育学部と非体育学部）と高校生（体育系クラブと非体育系クラブ）を対象にして、スポーツに対する意識・態度に関する調査を実施し、その結果に基づいて考察した。

2 資料収集

- (イ) 被調査者（表1）
- (ロ) 内容 『スポーツに対する意識・態度に関する調査』
- (ハ) 方法 アンケート調査
- (ニ) 時期 昭和55年6月15日 — 同7月5日

3. 結果と考察

(1) スポーツ指向

まず、所属別に競技大会への出場をみたところ（表2）、学校内対抗競技にはかなり多くのものが出場経験をもっていることがわかった。特に大学の体育学部以外の学生と高校の非体育系クラブ所属の場合においても、約半数が出場経験をもっており、特に女性の方が高かった。しかし、他の学校、地区、および全国レベルでの競技大会出場経験は、やはり体育学部の学生と体育系クラブの生徒に高かった。そしてマスコミにスポーツ選手として載った経験も、体育により親しんでいるグループに高く、特に体育

表1 被調査者内訳

所 属 性	大 学				高 校					
	体 育 学 部		非 体 育 学 部		体育系クラブ		非体育系クラブ			
	男	女	男	女	男	女	男	女		
	100(12.5)	100(12.5)	100(12.5)	100(12.5)	100(12.5)	100(12.5)	100(12.5)	100(12.5)		
年 齢	16歳以下	17 歳	18 歳	19 歳	20 歳	21 歳	22 歳	23 歳	24 歳	25歳以上
	207(26.1)	120(15.1)	157(19.7)	135(17.0)	125(15.7)	41(5.2)	5(0.6)	3(0.4)	0(0)	3(0.4)
地 域	大都市	地方都市	田 舎							
	219(27.4)	369(46.1)	212(26.5)							

表2 所属別にみた競技参加の経験

		大 学				高 校				(%)
		体 育 学 部		非 体 育 学 部		体育系クラブ		非体育系クラブ		
		男	女	男	女	男	女	男	女	
学校内対抗競技	ない	34 (34.0)	34 (36.7)	44 (44.9)	37 (38.1)	27 (27.3)	20 (20.4)	51 (52.6)	31 (33.7)	278
	ある	66 (66.0)	64 (65.3)	54 (55.1)	60 (61.9)	72 (72.7)	78 (79.6)	46 (47.4)	61 (66.3)	501
計		100	98	98	97	99	98	97	92	779
対抗競技	ない	23 (23.0)	20 (20.4)	52 (53.1)	54 (57.5)	40 (40.4)	23 (24.0)	73 (76.0)	63 (68.5)	348
	ある	77 (77.0)	78 (79.6)	46 (46.9)	40 (42.5)	59 (59.6)	73 (76.0)	23 (24.0)	29 (31.5)	425
計		100	98	98	94	99	96	96	92	773
地区対抗競技	ない	25 (25.0)	27 (62.2)	59 (60.2)	67 (68.4)	46 (46.5)	47 (48.5)	76 (76.8)	74 (74.0)	421
	ある	75 (75.0)	72 (39.8)	39 (39.8)	31 (31.6)	53 (53.5)	50 (51.5)	23 (23.2)	26 (26.0)	369
計		100	99	98	98	99	97	99	100	790
全国大会	ない	63 (63.0)	56 (56.6)	93 (93.9)	97 (99.0)	98 (99.0)	90 (90.9)	98 (99.0)	99 (100.0)	694
	ある	37 (37.0)	43 (43.4)	6 (6.1)	1 (1.0)	1 (1.0)	9 (9.1)	1 (1.0)	0 (0.0)	98
計		100	99	99	99	99	99	99	99	792
スポーツ選手としてマスコミに掲載	ない	65 (65.7)	65 (66.3)	91 (93.8)	96 (97.0)	93 (93.0)	94 (95.0)	95 (96.0)	98 (98.0)	697
	ある	34 (34.3)	33 (33.7)	6 (6.2)	3 (3.0)	7 (7.0)	5 (5.0)	4 (4.0)	2 (2.0)	94
計		99	98	97	99	100	99	99	100	791

P<0.05

学部の場合男子27.0パーセント、女子43.0パーセントであった。

つぎに、スポーツに対する一般的態度としてのスポーツ・オリエンテーションを所属別にみたところ、およそ次のとおりであった(表3)⁽⁴⁾。

まず、他の人との関係でスポーツをすすめたり、世話をしたり、リーダーになったり、組織・運営することと、所属との間にはいずれも有意な差がみられた。すなわち、これらの個人的経験の高いものは、やはりスポーツに接することの多いものに多かったのである。例えば、全体ではスポーツ集団の組織・運営の経験は4.3パーセントに過ぎなかったものの、体育学部の学生の場合はかなり高く、スポーツ集団の組織・運営の経験は男性11.0パーセント(女性7.0パーセント)、リーダー経験は男性17.0パーセント(女性10.0パーセント)であった。一方、自己との関係でみた場合、自己の運動能力に自信をもっているものは全体では6.8パーセントに過ぎなかったが、体育学部の学生の場合男性20.0パーセント、女性11.0パーセントであった。

また自発的練習についてみても全体では14.7パーセントに過ぎなかったが、体育学部の学生の場合男性40.0パーセント、女性22.0パーセントであった。

総体的にスポーツ・オリエンテーションについていえることは、それほど高くなかった(10.2)，ということである。体育学部学生21.9パーセント(男性26.7，女性17.0)，体育学部以外の学生7.1パーセント(男性11.0，女性3.0)，体育系クラブ所属高校生9.7パーセント(男性12.5，女性6.8)，体育系クラブに所属していない高校生2.5パーセント(男性3.3女性1.6)であった。

以上の結果は、スポーツの知識・技術的側面の高さが、スポーツに対する一般的態度を決定することを示唆するものである。

(2) スポーツ・モチベーション

スポーツによく親しんでいると思われるもの(体育学部学生，体育系クラブ所属高校生)について、スポーツ参加の動機が「他人との関係」，および「自己との関係」で捉えられているかを見

表3 所属別スポーツ・オリエンテーション

	大 学				高 校				(%)
	体 育 学 部		非 体 育 学 部		体 育 系 ク ラ ブ		非 体 育 系 ク ラ ブ		
	男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100	
a	26(26.0)	114(14.0)	7(7.0)	0(0)	10(10.0)	6(6.0)	3(3.0)	1(1.0)	67(8.4)
b	11(11.0)	7(7.0)	6(6.0)	2(2.0)	3(3.0))	4(4.0)	1(1.0)	0(0)	34(4.3)
c	20(20.0)	11(11.0)	7(7.0)	1(1.0)	8(8.0)	2(2.0)	5(5.0)	0(0)	54(6.8)
d	46(46.0)	38(38.0)	21(21.0)	8(8.0)	21(21.0)	15(15.0)	4(4.0)	3(3.0)	156(19.5)
e	17(17.0)	10(10.0)	11(11.0)	2(2.0)	11(11.0)	5(5.0)	4(4.0)	2(2.0)	62(7.8)
f	40(40.0)	22(22.0)	14(14.0)	5(5.0)	22(22.0)	9(9.0)	3(3.0)	2(2.0)	117(14.6)
全体	(26.7)	(17.0)	(11.0)	(3.0)	(12.5)	(6.8)	(3.3)	(1.6)	(10.2)

- 注¹ …… a あなたは他の人の練習の世話をすることがありますか。
b あなた他の人のためにスポーツ活動を組織したり運営したりすることがありますか。
c あなたの運動能力は他の人に比べて優れていると思いますか。
d あなたは他の人にスポーツをすすめることができますか。
e あなたはリーダーに選ばれたことがありますか。
f あなたは自発的に練習をすることができますか。

注² ……注¹ の質問項目に対し「そのとおり」，「まあそうだ」，「やや違う」，「そういうことはない」，「わからない」の5つの選択肢のうち「そのとおり」と答えた者のみ抽出。

注³ …… χ^2 検定

た(表4)。

まず、「他人との関係」でみた。「勝つ見込みのない試合をするのは馬鹿げている」としたものは、全体で4.5パーセントであり、所属間に有意な差はみられなかった。このような考えに対して、積極的に否定的な態度を示したものが多かった(78.7)。また、「観客が多いほどプレイに熱中するか」という設問に対して、「熱中する」と答えたものは全体で21.5パーセントであった。ここでふたつの点があげられる。ひとつは、観客に対する意識が大学生に高いということである。高校体育系クラブ所属男性23.0パーセントに対して、体育学部男性41.0パーセント、高校体育系クラブ所属女性7.0パーセントに対して、体育学部女性15.0パーセントであった。もうひとつの点として、男性は女性よりもより観客を意識していることである(男性32.0、女性11.0)。さらに、「コーチや監督がい

る時のほうがプレイに熱中する」としたものは全体で20.5パーセントであり、大学生>高校生という傾向が認められた(大学生25.0、高校生16.0)。つづけて、「スポーツの楽しみは多くの人々から賞讃されること」にあるとするものは、全体で19.0パーセントであった。大学生24.5パーセント、高校生13.5パーセントで、ここでも大学生>高校生という関係がみられた。さらに、「スポーツをするとき、ぶかっような姿を人に見られたくない」とするものは、全体で19.3パーセントで、統計的には有意な差がみられなかったが、大学生16.5パーセント、高校生22.0パーセントで高校生の方が高い傾向を示した。全体的にみると、否定的な態度が38.8パーセント見受けられたが、他人の目を意識する姿勢は、高校生(14.4)よりも大学生(19.5)のほうが高く、また性別では女性(13.9)よりも男性(20.1)のほうが高かった。

表4 所属別スポーツ・モチベーション

		大学体育学部		高校体育系クラブ		(%)	大学-高校 間の検定	男-女間の 検定
		男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100	計 n=400		
他人との 関係	a	2(2.0)	5(5.0)	7(7.0)	4(4.0)	18(4.5)	n. s.	n. s.
	b	41(41.0)	15(15.0)	23(23.0)	7(7.0)	86(21.5)	P<0.05	P<0.05
	c	24(24.0)	26(26.0)	15(15.0)	17(17.0)	82(20.5)	P<0.05	P<0.05
	d	29(29.0)	20(20.0)	17(17.0)	10(10.0)	76(19.0)	P<0.05	n. s.
	e	18(18.0)	15(15.0)	25(15.0)	19(19.0)	77(19.3)	n. s.	n. s.
全 体		(22.8)	(16.2)	(17.4)	(11.4)	(17.0)		
自の 関係	f	61(61.0)	57(57.0)	64(64.0)	62(62.0)	244(61.0)	n. s.	n. s.
	g	43(43.0)	39(39.0)	44(44.0)	40(40.0)	166(41.5)	n. s.	n. s.
	h	36(36.0)	44(44.0)	41(41.0)	49(49.0)	170(42.5)	n. s.	n. s.
全 体		(46.7)	(46.7)	(49.7)	(50.3)	(48.3)		

注¹ …… a あなたは勝つ見込みのない試合をするのは馬鹿げていると思いますか。

b あなたは観客が多いほど、プレイに熱中する方ですか。

c あなたはコーチや監督がいる時の方が、プレイに熱中する方ですか。

d あなたはスポーツの楽しみは、多くの人から賞讃されることだと思いますか。

e あなたはスポーツをする時、ぶかっような姿を人に見られたくないと思いますか。

f 上手でなくても、スポーツを楽しめばよいと思いますか。

g スポーツをする際、もっとも大事な事はプレイすることで壮快な気分になることだと思いますか。

h 納得のいくプレイができれば、勝敗は重要ではないと思いますか。

注² ……表3の注² と同じ。

注³ ……表3の注³ と同じ。

つぎに、「自己との関係」についてみたところ、スポーツはプレイを楽しみ、壮快さを味わい納得のできるプレイに満足することだとするものは、全体で48.3パーセントと高く、自己求心的姿勢がかなり強かった（消極的肯定を加えると73.0）。

項目別にみたところ、「上手でなくても、スポーツは楽しめばよい」とするものは、全体で61.2パーセントであった。所属間に有意な差はみられなかったが、大学生59.0パーセント、高校生63.0パーセントがそのような態度を示した。性別にみたところ、女性よりも男性にこの傾向が強かった（男性63.0、女性59.5）。また、「スポーツをする際、もっとも大事な事は、プレイすることで壮快な気分になること」だとするものは全体で41.5パーセントで、所属間に有意な差はなく、大学生41.0パーセント、高校生42.0パーセントであった。そしてこの項目でも男性のほうがやや高かった（男性43.5、女性39.5）。つぎに、「納得のいくプレイができれば、勝敗は重要でない」とするものは全体で42.5パーセントであり、所属間に有意な差はみられず、大学生40.0パーセント、高校生45.0パーセントであった。そして、女性のほうが若干高い値を示した（男性38.5、女性46.5）。

以上、スポーツ参加の動機をみてきたが、他の人との関係では約2割弱のものが他人の目を意識しており、大学生＞高校生という傾向がみられた。と同時に、男性＞女性という傾向もみられた。しかし、自己との関係でみると約5割のものが自己との関係でスポーツを位置づけており、大学生と高校生、男性と女性の間には有意な差はみられなかった。

以上の分析結果から、スポーツ参加の動機がかなり自己求心的であることがわかった。しかし、他の人を意識する姿勢もみられないこともない。それはスポーツが優劣を競うものであり、その結果が客観的に判断され、それなりの評価を得るからである。勝っても負けてもそれなりの評価を得る以上、他の人々の態度に関心が向けられるのも当然であろう。と同時に、スポーツは自己との関係においても、無視できないも

のをもっている。とくに自己との関係におけるスポーツの目標は、気分転換から肩こりを治すこと、果ては「自分はこういう人間になりたい」といった、自己実現の欲求までも含んでいる。

動機づけの要因を内的動機づけと外的動機づけとに分けて、シンガーは「衝動の根源が人の内面にあるとき、すなわち人がそのもののため何かを行なうとき、その人は内的に動機づけられたという……外的に動機づけられた人は、そこからうける物的報酬のために行動する」と述べ、「内的に動機づけられた人はその人の喜び、満足、技術の向上という個人的理由によって技術の練習をしたり、スポーツに参加する」のに対し、「外的に動機づけられた人は友情、心の満足、上達の為でなく、承認や賞讃のためにスポーツを行なう」と述べている。⁽⁵⁾実際にスポーツをはじめようというときに大きくはたらくのは内的な動機づけであろうが、スポーツをはじめてからは外的要因がかなりはたらくことが考えられる。この場合に他の人よりも上達しようというのは、相手に勝つことであり、外的な賞讃とか承認ということでスポーツに励むということである。

(3) スポーツの規範・価値

(a) ルールの遵守

まず、日常生活の場におけるルールの遵守について（表5）「スポーツをする以上は、絶対に決まったことは守らなければならない」とするものは全体で74.0パーセントであった。また、「必ずしも正しくないような場合でも、絶対に上からの命令・指示は守らなければならない」とするものは全体で11.8パーセントであり、否定的なものが半分近くあった。そして、共に所属間に有意な差はみられなかった。

つぎに、スポーツの場でのスポーツ・ルール遵守について、「不正なプレイは絶対にしない」とするものは高校生64.5パーセントで、大学生60.5パーセントよりも高かった。また、高校一大学の所属と同様に男女の間に有意な差がみられ、高校の女性はとくに高く79.0パーセント、最も低かったのは大学生の男性54.0パーセントであった。また、「プレイ中に反則されたり荒

っぽいプレイを受けた場合、機会をみつけて反則や荒っぽいプレイをしてはいけない」とするものは全体で61.5パーセントであった。所属間に有意な差はみられなかったが、高校男子15.2パーセントが悪質プレイのお返しを肯定しているのが目立った。「レフェリーが間違っただけをした場合でも絶対に抗議してはいけない」とするものは全体で17.8パーセントであった。所属間に有意な差はみられなかったが、高校男性55.0パーセントはレフェリーに抗議してもよいとしていた。そして「レフェリーが間違っただけ自分（のチーム）に有利な判断をした場合、それを黙っていてもよい」とするものは全体で30

.5パーセントであり、大学生と高校生の間には有意な差がみられ、大学生27.0パーセント、高校生34.0パーセントであった。以上の項目は、プレイ中の“ずるさ”をみたものであるが、調査結果においてかなりのずるさがスポーツの場にみられることを示している。

(b) コーチ・監督のルール遵守

「コーチ・監督は絶対にレフェリーに抗議してはいけない」とするものは全体で11.0パーセントであった。所属別にみたところ、有意な差は認められなかった。また、自分のコーチ・監督が「スポーツマンシップをかね備えている」とするものは全体で37.5パーセントであった。

表 5 所属別ルール遵守

	大 学 体 育 学 部		高 校 体 育 系 ク ラ ブ		計 n=400	大学—高校 間の検定	男—女間の 検定
	男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100			
a	72(72.0)	77(77.0)	71(71.0)	76(76.0)	296(74.0)	n. s.	n. s.
b	5(5.0)	13(13.0)	17(17.0)	12(12.0)	47(12.0)	n. s.	n. s.
c	54(54.0)	67(67.0)	50(50.0)	79(79.0)	250(62.5)	P<0.05	P<0.05
d	19(19.0)	16(16.2)	18(18.0)	18(18.0)	71(17.8)	n. s.	n. s.
e	63(63.0)	64(64.0)	54(54.0)	65(65.0)	246(61.5)	n. s.	n. s.
f	25(25.0)	29(29.0)	32(32.0)	36(36.0)	122(30.5)	P<0.05	n. s.
全 体	(39.7)	(44.3)	(40.3)	(47.7)	(43.0)		

- 注¹ …… a スポーツをやる以上は決ったことは必ず守るべきである。
b 正しくないような場合でも、上からの指示は必ず守るべきである。
c 見つからなくても不正なプレイは絶対にしない。
d レフェリーがミス・ジャッジをしたような場合でも、抗議してはいけない。
e ラフ・プレイや反則に対してお返しをしてはいけない。
f レフェリーが間違っただけ自分（のチーム）に有利な判断をした場合、黙ってはいけない。

注² ……表 3 の注² と同じ。

注³ ……表 3 の注³ と同じ。

表 6 所属別にみた、コーチ・監督のルール遵守

	大 学 体 育 学 部		高 校 体 育 系 ク ラ ブ		計 n=400	大学—高校 間の検定	男—女間の 検定
	男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100			
a	11(11.0)	14(14.0)	11(11.0)	8(8.0)	44(11.0)	n. s.	n. s.
b	31(31.0)	56(56.0)	33(33.0)	30(30.0)	150(37.5)	P<0.05	P<0.05
全 体	(21.0)	(35.0)	(22.0)	(19.0)	(24.9)		

- 注¹ …… a 審判が間違っただけをした場合、監督・コーチは審判に抗議してもよいと思いますか。
b あなたのコーチ・監督はルールを守り、スポーツマンシップをかね備えていると思いますか。

注² ……表 3 の注² と同じ。

注³ ……表 3 の注³ と同じ。

そして、所属間に有意な差があり、大学生43.5パーセント、高校生31.5パーセントが自分のコーチ・監督をそのように評価しており、男女間においては、女性のプレイヤーがより肯定的で（男性32.0、女性43.0）、とくに大学の女性が56.0パーセントで最も高かった（表6）。以上は、プレイヤー側から、スポーツを指導育成する側のコーチ・監督のルール遵守の割合をみたものである。

(c) コーチ・監督のプレイヤーに対する態度
コーチ・監督がプレイヤーにどのような態度をもっているかをみたところ（表7）、コーチ・監督が「練習方法についてよく説明してくれる」と感じているものは、全体で29.8パーセントであり、男女間には有意な差はみられなかったが、男性よりも女性のほうが高かった（男性27.5、女性32.0）。また大学と高校の間には有意な差が認められ、高校生よりも大学生のほうが高かった（大学生34.0、高校生25.5）。「食べ物や睡眠について、常によく指示する」としているものは全体で17.3パーセントであり、所属間に有意な差があり、高校生<大学生（高校生11.0、大学生23.5）、男性<女性（男性15.5、女性19

.0）という関係が認められた。さらに、「マナーについて非常に強く指示する」ものは全体で32.3パーセントで、有意な差が認められ、男性がやや高く（男性34.5、女性30.0）、また大学生のほうが高校生よりも高かった（大学生35.0、高校生29.5）。「プレイヤーの意見を非常に尊重する」ものは全体で15.8パーセントで、性差はなく、大学生と高校生の間に有意な差がみられ大学生に高かった（大学生19.5、高校生12.0）。また、「服装について非常によく指示する」ものは全体で26.6パーセントであり、性差はみられなかったが、大学生と高校生の間に有意な差がみられた（大学生21.0、高校生32.0）。とくに、高校の男性については41.0パーセントのものが、服装についてコーチ・監督から非常によく指示を受けるとしていた。さいごに、「規則に非常にうるさい」としたものは全体で31.3パーセントであった。所属間に有意な差はみられなかったが、僅かながら男性に高く（男性33.0、女性29.5）、大学生に高い傾向がみられた（大学生32.0、高校生30.5）。

以上の分析結果は、コーチ・監督がプレイヤーにスポーツを中心として規範・価値を形成し

表7 所属別にみた、コーチ・監督のプレイヤーに対する態度

	大 学 体 育 学 部		高 校 体 育 系 ク ラ ブ		(%)	大学—高校 間の検定	男—女間の 検定
	男 n=100	女 n=100	男 n=100	女 n=100			
a	26(26.0)	42(42.0)	29(29.0)	22(22.0)	119(29.8)	P<0.05	n. s.
b	17(17.0)	30(30.0)	14(14.0)	8(8.0)	69(17.3)	P<0.05	P<0.05
c	30(30.0)	40(40.0)	39(39.0)	20(20.0)	129(32.3)	P<0.05	P<0.05
d	15(15.0)	24(24.0)	16(16.0)	8(8.0)	63(15.8)	P<0.05	n. s.
e	19(19.0)	23(23.0)	41(41.0)	23(23.0)	106(26.6)	P<0.05	n. s.
f	28(28.0)	36(36.0)	38(38.0)	23(23.0)	125(31.3)	n. s.	n. s.
全 体	(22.5)	(32.5)	(29.5)	(17.3)	(25.5)		

- 注¹ …… a あなたのコーチ・監督は練習方法についてよく説明してくれますか。
b あなたのコーチ・監督は食べ物や休養についてよく指示しますか。
c あなたのコーチ・監督はマナー（エチケット）についてよく指示しますか。
d あなたのコーチ・監督はプレイヤーの意見を尊重しますか。
e あなたのコーチ・監督は服装についてよく指示しますか。
f あなたのコーチ・監督は規則にうるさいですか。

注² ……表3の注² と同じ。

注³ ……表3の注³ と同じ。

たり補強したりするうえでの機能の程度を示唆するものである。調査結果からみる限り、4人に1人がコーチ・監督の積極的姿勢を指摘したわけである。このことは顔と顔をつき合わせた関係（face-to-face relation ship）に基づく全人格的接触が、規範・価値の形成、補強にそれほど決定的な影響をもっていないことを示唆するものである。スポーツ集団のような全人格的接触の可能性をもった小集団においても、現代の複合社会における複雑な人間関係はプレイヤー個人に対するコーチ・監督の機能の制約を示しているのである。

また、学校内で勝つことの評価は全体的にはそれほど高いとはいえなかったが、高校よりも大学生に高く、また男性よりも女性に高いという傾向がみられた。

以上、スポーツ規範・価値についてみてきたが、スポーツが本質的にもっている期待・可能性としての規範・価値の形成・補強機能は、ある程度の制約のなかで位置づけられていることがわかった。それはプレイヤーのルール遵守においてプレイ中の“ずるさ”がかなりみられたこと、また、コーチ・監督のルール遵守という観点からの信頼の度合が必ずしもそれほど高くなかったこと、そして、コーチ・監督が積極的にプレイヤーの規範・価値の形成、補強にはたらきかける割合がそれほど決定的でなかったこと、そして勝つことの評価もそれほど高いとはいえなかったこと、などを背景にしている。このことは、スポーツ集団における顔と顔をつきあわせた全人格的接触の内容も、現実にはかなり形骸化したものであることを示唆している。その意味では、スポーツ集団のもっているプレイヤーに対する規範・価値の形成、補強の機能は制約されているのである。と同時に、このことが文化としてのスポーツのもっている期待・可能性としての機能を制約しているといえるのである。

スポーツの場での競争・協同関係は、社会規範と価値の補強に積極的に意義を果している。少なくとも果す可能性を持っている、といわれている⁽⁶⁾。それはこうした関係のなかで、スポー

ツ参加者は特定の規範と価値を好ましい態度として身につけていくからである。社会規範と価値の補強にスポーツが正機能を果すと考えられる要件は、スポーツが本来、人間的社会的側面に関係していること、プライマリー・グループとしてのスポーツ集団のもっている機能、および、スポーツ自体の内包する競争・協同の結果に根ざしている⁽⁷⁾。しかしながら、大衆社会状況下での現実のスポーツをとりまく環境は必ずしも期待・可能性としての「積極的役割を果すにあたって考えられる要件」ではなく、逆機能の要素をも含み得るものであるといえる。それは競技スポーツにおいては技術の高度化とそれに伴う外的報酬を期待し得る場として、またレクリエーション・スポーツにおいても、現在のそれは経済的・時間的余裕を満し得るもののみが、主としてスポーツの場に参加し得るという意味でもともにエリート化されている点に求められる。それ故、現実のスポーツは多少なりとも日常性のうえに成立しており、ここにスポーツに対する期待・可能性が跛行的様相を呈する一因を認め得るのである。

4 結語

スポーツに対する意識・態度について考察してきたが、以上を総括すると次の如くである。

- ① スポーツの知識・技術的側面の高さが、スポーツに対する一般的な態度を決定する。そしてスポーツへの接近度と、スポーツに対する一般的な態度との間に関係がある。
- ② スポーツ参加の動機がかなり自己求心的である。しかし、他の人の目を意識する姿勢もかなり高かった。それはスポーツが自己自身との関係を本来もっているものであり、また同時に優劣を競うものであり、客観的に優劣の評価を得るからである。
- ③ ルールの遵守においては、プレイ中の“ずるさ”がかなりスポーツの場にみられるし、全人格的接触を媒介とするスポーツの規範・価値の形成補強機能が、プレイヤーに対してそれほど決定的な影響をもっていない。
- ④ コーチ・監督がスポーツを通して、プレ

ィヤーに規範・価値を形成したり補強する機能の程度は高くなかった。

- ⑤ プレイヤーからみたコーチ・監督のプレイヤーに対する積極的な態度は、高校生よりも大学生に、とくに大学の女性に強く認められた。

以上、体育・スポーツに対する高校生、大学生の意識・態度は、かなり跋行的傾向をもっていることがわかった。それは現代の高度に複雑化された社会において、若者の思考様式と、それによって決定される行動様式が多様性と一時性を内包しているからである。それは同時に、第三の波(the third wave —— A.トフラー)のひとつの具体的なモードを体育・スポーツに対しても迫るものとしても注目される。

注・文 献

- 1) 磯村英一, 「現代社会とスポーツ」, 大修館。
- 2) T. Parsons, 武田良三監訳, 「社会構造とパーソナリティ」, 新泉社, P.387。
- 3) 鈴木清, 「体育における人格治療」, 体育の科学, 1965年6月号, PP.317—320。
- 4) 以下, 積極的肯定(「そのとおり」と答えたもの), または積極的否定(「そういうことはない」と答えたもの)のみを抽出した。それ故, 消極的肯定(「まあそうだ」と消極的否定(「やや違う」)を加えれば, もっと数値は高くなる。
- 5) R. N. Singer, 松田岩男監訳, 「運動学習の心理学」, 大修館, P.199。
- 6) 藤原健固, 「スポーツと社会化」, 1976年, 道和書院, P.157。
- 7) 前掲書, P.150。